Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-07

現代英語における前置詞使用実態と日本人英語学習者による前置詞使用傾向の解明ーコーパス研究をふまえた新たな前置詞指導を目指してー

中西，淳

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2021-03-25
(Date of Publication)
2022-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7965号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007965

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式 3）

論　文　要　旨

氏　名　中西　淳
専　攻　グローバル文化専攻
指導教員氏名　石川　慎一郎　教授

論文題目（外国語の場合は日本語訳を併記すること）
現代英語における前置詞使用実態と日本人英語学習者による前置詞使用傾向の解明―コーパス研究をふまえた新たな前置詞指導を目指して―

論文要旨

本研究では，現代英語における前置詞の位置づけを再考し，日本人英語学習者の前置詞使用における問題点を解明することで，日本人英語学習者を対象とした前置詞指導の手がかりを探る。この目的に沿って，本論文は全体で 4 部 14 章で構成されており，まず，第 1 章では，分析に先立ち，前置詞研究の重要性について，現代英語コーパス研究や英語学習者コーパス研究の視点から確認し，日本人英語学習者にとっての前置詞習得の困難性について考察した。

第Ⅰ部「研究の枠組み」では，本研究での研究対象や，基盤理論，研究手法などを整理し，さらに，関連する先行研究を概観し，最後に，本研究で使用する統計手法やソフトウェアについてまとめた。具体的には，まず，第 2 章で，研究対象となる前置詞の定義や範囲，それらの区分について整理した上で，本研究での前置詞の定義づけを行った。次に，第 3 章では，本研究において基盤理論となるコーパス言語学の概要について確認し，本研究で使用するコーパスやコーパスへの情報付与システムについて紹介した。また，第 4 章では，学習者の第 2 言語（L2）としての英語による産出を分析する際の基盤となる研究手法について概観し，本研究で使用する研究手法を設定した。その後，第 5 章においては，本研究に関連する先行研究を，現代英語における前置詞の位置づけに関する研究と，英語学習者による前置詞使用に関する研究，英語教育における前置詞指導に関する研究の 3 つに分けて紹介した。最後に，6 章においては，本研究で用いる統計手法について概観し，その後，本研究で用いるテキストデータを処理するためのソフトウェアや，統計解析のためのソフトウェアを紹介し，それらの使用法について概観した。

第Ⅱ部「現代英語における前置詞の位置付け」では，日本人英語学習者の前置詞使用を議論する前提として，現代英語における前置詞の使用実態を調査した。その際，はじめに必要になるのは，多様な前置詞の中で，高頻度で，かつ，幅広く使用される中核的な前置詞を抽出することである。そこで，第 7 章では，現代英語コーパスを使用し，多様な地域やジャンルに配慮しつつ頻度調査を行い，現代英語において中核的な位置を占める前置詞（中核前置詞）を特定した。現代英語には広義で取ると 209 種の前置詞が存在するが，調査の結果，高頻度上位 20 項目で前置詞の全体頻度の 90%以上，上位 50 項目で 95%以上を占めていることが確認された。つづいて，第 8 章では，前章で特定された中核前置詞の中から，前置詞の基本義である空間上の位置を示し，総じて頻度が高く，かつ，しばしば混同して使用されることが多い 3 種の基本前置詞として at・in・on の 3 語を取り上げた。そのうえで，コーパス調査の知見をふまえた前置詞の語義記述の改善の可能性を探るために，現代英語における頻度や，高頻度の後続名詞などを調査し，学習辞書の語義記述の改善を試みた。その結果，at の語義は 20 区分に，in の語義は 36 区分に，on の語義は 49 区分に分けられることが明らかになった。また，後続名詞の意味情報による意味区分を行った結果，at は 4 種，in は 7 種，on は 7 種の意味区分に分けられることが示唆された。さらに，各語義に辞書重複度やコーパス頻度に基づく重要度スコアを提示することが可能となった。

第Ⅲ部「日本人英語学習者による前置詞使用の実態」では，日本人英語学習者の前置詞使用に関わる問題を解明するため，前置詞の総体使用・意味別使用・クラスター（3 語連鎖）使用の 3 観点に基づいて学習者コーパス調査を行なった。まず，第 9 章の前置詞の総体使用調査では，英語母語話者との比較や，他のアジア圏英語学習者との比較，異なる習熟度間での比較を行い，日本人英語学習者に特有の前置詞使用傾向や，習熟度に伴う前置詞使用傾向の変化について調査を行なった。分析の結果，日本人英語学習者が使用する前置詞の総頻度は，他のアジア圏英語学習者の場合と同様に，習熟度の上昇によって英語母語話者に近接していくものの，個別前置詞の頻度に注目すれば，日本人英語学習者は，英語母語話者や他のアジア圏英語学習者と異なる特異なパタンを示し，とりわけ near や toward といった前置詞の過剰使用によって特徴づけられることが確認された。つづいて，第 10 章の意味別使用調査と第 11 章のクラスター使用調査では，基本前置詞である at・in・on に限定し，それらを意味別・クラスター別に頻度を算出し，英語母語話者とどの程度異なっており，それらの問題は習熟度に伴って解消するかについて調査を行なった。その結果，日本人英語学習者はそれぞれの前置詞を中核的な意味に偏って多用しており，多様な拡張的な意味での使用がほとんど見られないことが明らかになった。また，日本人英語学習者は，これらの 3 語を少数の限定的な共起語とともに使用していることが明らかとなり，これは習熟度に伴い一層傾向が強まることが確認された。以上より，一見，平易に見える基本前置詞についても習得上の課題が残されていることが明らかになった。

これまで日本人英語学習者の前置詞使用の全体的傾向を概観したが，学習者の前置詞使用例には誤用も含まれている。こうした誤用を取り出して分析することで，学習者の抱える課題をより明確にすることができると考えられる。そこで，第Ⅳ部「日本人英語学習者による前置詞誤用の実態」では，まず，第 12 章において，日本人英語学習者が誤用した前置詞に焦点を当て，どのような前置詞の使用誤りが多く起こるかを調査した。その結果，日本人英語学習者は about や of を誤用することが多いことが明らかになり，「～について」や「～の」など，日本語からの直訳に基づいて英語前置詞を選択していることが示唆された。次に，第 13 章において，日本人英語学習者の at・in・on の誤用を記述し，それらの要因の追求を試みた。その結果，at や on が in に置き換えられる場合が多いことが明らかになり，これは at や on の多義性の理解不足に起因することが示唆された。

第Ⅵ部では，結論として，第 14 章において，本研究のまとめとして，得られた結果について整理を行い，その後，それぞれの調査で得られた結果をどのように教育的に応用することができるかについて検討した。

【課程博士用】

論文審査の結果の要旨

氏　　名	中西　淳		
論 文 題 目	現代英語における前置詞使用実態と日本人英語学習者による前置詞使用傾向の解明—コーパス研究をふまえた新たな前置詞指導を目指して—		
判　　定	合　格　・　不 合 格		
論文チェックソフトによる確　認	☑ 確認 ☐ 未確認　理由：		
審査委員	区　分	職　名	氏　名
	委員長	教授	柏木　治美
	委　員	教授	石川慎一郎
	委　員	統計数理研究所准教授	前田　忠彦
	委　員		
	委　員		
要　旨			
別紙のとおり			

（概略）

学位申請者中西淳氏の論文「現代英語における前置詞使用実態と日本人英語学習者による前置詞使用傾向の解明—コーパス研究をふまえた新たな前置詞指導を目指して—」（全 338 ページ）は，英語学習者にとって習得が困難であるとされる英語前置詞を対象として，コーパス言語学の分析手法に基づく分析を行い，その用法を解明し，英語教育への応用の可能性を論じたものである。

（論文構成）

本研究は，現代英語における前置詞の位置づけを再考し，日本人英語学習者の前置詞使用における問題点を解明することで，日本人英語学習者を対象とした前置詞指導の手がかりを探ることを目的にしたものである。本論文は全 4 部 14 章で構成されている。

第 I 部「研究の枠組み」では，まず，第 1 章「前置詞研究の意義」において，前置詞研究の重要性について，現代英語コーパス研究や英語学習者コーパス研究の視点から確認した。第 2 章「前置詞の諸相」では，研究対象となる前置詞の定義や範囲，それらの区分について整理した上で，本研究での前置詞の定義づけを行った。第 3 章「コーパス言語学の諸相」では，本研究において基盤理論となるコーパス言語学の概要について確認し，本研究で使用するコーパスやコーパスへの情報付与システムについて紹介した。第 4 章「L2 産出研究の諸相」では，学習者の第 2 言語（L2）としての英語による産出を分析する際の基盤理論と基盤手法について述べた。第 5 章「先行研究」では，関連する先行研究を 3 種にわけて概観した。最後に，第 6 章「データ処理手法」では，各種の統計手法など，本研究で用いるデータや処理方法を概観した。

第 II 部「現代英語における前置詞の位置付け」では，まず，第 7 章「コーパス調査に基づく中核前置詞の特定」において，多様な地域やジャンルに配慮しつつコーパス頻度調査を行い，中核前置詞を特定した。第 8 章「コーパス調査に基づく基本前置詞（at, in, on）の中核語義の特定」では，前置詞の基本義である空間上の位置を示し，総じて頻度が高く，かつ，しばしば混同して使用されることが多い 3 種の基本前置詞に着目し，現代英語における頻度や高頻度の後続名詞などを調査し，学習辞書の記述の改善を試みた。

第 III 部「日本人英語学習者による前置詞使用の実態」では，まず，第 9 章「前置詞全体の使用実態」において，日本人英語学習者の前置詞使用量に関して，英語母語話者や，他のアジア圏英語学習者との比較，異なる習熟度間での比較を行い，その特性を解明した。第 10 章「基本前置詞（at, in, on）の使用実態：語義別分析」では，日本人学習者による基本前置詞の使用上の特性を母語話者との比較を通して解明した。さらに，第 11 章「基本前置詞（at, in, on）の使用実態：3 語クラスター分析」では，基本前置詞を 3 語連鎖の単位で分析し，日本人学習者の特性を同じく母語話者との比較でとらえた。

第 IV 部「日本人英語学習者による前置詞誤用の実態」では，まず，第 12 章「前置詞の全体的誤用傾向」において，日本人英語学習者が誤用した前置詞に焦点を当て，どのような前置詞の使用誤りが多く起こるかを調査した。第 13 章「基本前置詞（at, in, on）の誤用傾向」では，日本人英語学習者の 3 前置詞の誤用を詳細に記述し，その要因の追求を試みた。

最後に，第 VI 部「結論」として，第 14 章「本研究のまとめと教育的示唆」では，得られた結果について整理を行うとともに，それぞれの調査で得られた結果をどのように教育的に応用できるかについて検討した。

（総合評価）

以上で見てきたように，本論文は，従来の英語学・英語教育学において十分な光が当てられていなかった前置詞について，その言語的・用法的特性はもとより，習得や教授までを射程におさめた包括的記述を目指した労作であり，英語前置詞の用法記述と教授について重要な知見を示した価値ある業績と結論できる。申請者はこれまでに学会・研究会で 12 回の研究発表を行い，学術論文 9 編（うち査読付き 4 本）を発表しており，研究の基礎力にも不足はない。よって，本審査委員会は，全員一致で，学位申請者である中西淳氏に，博士（学術）の学位を得る資格があると認める。